

識別番号	P 2 0
研究課題	Center of Global Concern をめざして
研究代表者	下川雅嗣（社会正義研究所所長・外国語学部国際関係副専攻）
共同研究者	ホアン・アイダル（神学部神学科）、小山英之（神学部神学科）、町野朔（法学研究科法曹養成専攻）、三浦まり（法学部法律学科）、江藤淳一（法学部国際関係法学科）、阿部るり（文学部新聞学科）、幡谷則子（外国語学部イスパニア語学科）、田村梨花（外国語学部ポルトガル語学科）、福武慎太郎（外国語学部アジア文化研究室）、中野晃一（国際教養学部国際教養学科）、村井吉敬（早稲田大学アジア研究所）（以上、社会正義研究所所員）
Summary	The Institute for the Study of Social Justice has been trying to reinvent its identity as a new “Center of Global Concern” in the past couple of years. This academic year, we have already organized several public events on the common theme of “Rethinking Public Policies from a Human Rights Perspective” and in our annual international symposium in November, we raise our voice against the tyranny of neoliberalism, and focus on a new possible future of various movements seeking an alternative world and their alignment. How can the domestic and international movements to assist the poor create a network and support one another? How can we support the process of <i>conscientization</i> of the middle class? Furthermore, how can we visualize “another world” and to indicate the political roadmap to move towards that direction? We hope to provide a forum to discuss and reflect on those issues.

1. 本研究の目的および背景

今日の社会科学研究の主流を形成する客観主義アカデミズムの傾向に対し、「激動する現代世界に向かって広く窓を開き、人類の希望と苦悩をわかちあい、世界の福祉と創造的進歩に奉仕することを念願する」ことを教育理念に掲げる本学では、故・鶴見和子教授の「内発的发展論」や石澤良昭学長のカンボジア人自身による遺跡保存への取組などに代表される「上智学派」の伝統を育んできた。また本研究所でも、グローバルな規模での開発や貧困などの問題とむきあい、地域住民（「小さな民」）の視点や People's Process の概念に根ざし研究や意識化、実践活動に取り組んできた。「他者とともに立つ（*with Others*）」上智学派の伝統の継承と刷新をめざし、“Center of Global Concern”として実質的な活動を展開する。

2. 研究企画の概要 I（既に実施したもの）

「人権の視点から公共政策を考える」を共通テーマに、以下の研究企画を実施した。

①映画「新・あつい壁」（監督：中山節夫）上映会&トーク

- ・2009年5月28日（木曜日）17:15－20:00
- ・四谷キャンパス 10号館講堂
- ・協賛：上智大学文学部新聞学科橋場義之研究室／毎日新聞社
- ・外部講師：森元美代治さん（ハンセン病回復者）

[趣旨]

ハンセン病ゆえに殺人の嫌疑をかけられ死刑となった「藤本事件」を題材にしたフィクション映画。この冤罪事件の不条理はもちろんのこと、過酷なハンセン病差別の現実が決して過去の問題ではなく、現在を生きる自分たちの問題であることにも気づかされる。間違った政策によって人権を奪われたハンセン病の歴史を改めて突きつけるとともに、映像では表現しづらい差別の心理構造を見事に描き出している。上映会ののち、カトリック信者でもある森元美代治さんをお招きして学生たちとの対話の機会を持った。

② “Poverty and Rights” 講演会

- ・ 2009 年 6 月 4 日（木曜日）15:15-16:45
- ・ 四谷キャンパス中央図書館 921 号室
- ・ 外部講師：Dr. Dan Banik（オスロ大学准教授）
- ・ 共催：グローバル・スタディーズ研究科国際関係論専攻

[趣旨]

オスロ大学開発・環境センターにおける貧困と開発プログラムを統括する講師を招き、開発に関わる国際人権政策の新たな理論展開について、豊富な事例を交えつつ講演いただいた。

③ 「死刑の現実を見つめる－米国と台湾の現場から」講演会

- ・ 2009 年 6 月 24 日（水曜日）17:30-19:30
- ・ 四谷キャンパス中央図書館 921 号室
- ・ 外部講師：トシ・カザマさん（ニューヨーク在住カメラマン）
- ・ 後援：イエズス会社会司牧センター／「死刑を止めよう」宗教者ネットワーク

[趣旨]

滞米経験 35 年のカザマさんが、長年撮影してきた米国の少年死刑囚やその家族、被害者遺族、台湾の死刑囚やその家族、米国や台湾の死刑執行場などの写真をスライドショーで見せながら、死刑囚たちの生い立ちや犯罪に至る事情、米国や台湾の死刑執行の実態などを語られた。死刑を観念的な問題ではなく、生きた人間に関する現実の問題として体感し、考えるヒントを提供いただいた。カザマ氏は、「人権のための殺人被害者遺族の会」（Murder Victims' Families for Human Rights: MVFHR、米国）理事、「Ocean-被害者と加害者の出会いを考える会」（日本）運営委員も務められている。

④ 「渋谷・宮下公園ナイキ化計画の何が問題なのか？」ミニ・シンポジウム

- ・ 2009 年 7 月 9 日（木曜日）17:15-19:30
- ・ 四谷キャンパス中央図書館 921 号室
- ・ 外部講師： いちむらみさこさん（美術家）
小川てつオさん（エノアール）
植松青児さん（みんなの宮下公園をナイキ化計画から守る会）
黒岩大助さん（渋谷・野宿者の生活と居住権を勝ち取る自由連合ーのじれん）
- ・ コメンテーター： 中野晃一（本研究所所員）
村井吉敬（本研究所所員）

[趣旨]

にぎやかな渋谷の中心地にあつて、緑あふれる市民の憩いの場である区立宮下公園がナイキ・ジャパン社の資金により全面改修され、同社に公園の命名権も売却されようとしている。実はこの計画には、野宿者排除、公共空間の民営化、民主的プロセスの欠如、ナイキをはじめとする多国籍企業の問題など、新自由主義的な政治経済の下にある社会を象徴するような、様々な問題点が指摘されている。この問題に取り組んでこられた方々をお招きし、マスメディアでは報道されない現場の声を紹介するとともに、本研究所所員も交えて、学生を始めとした参加者たちと議論を深めた。

⑤ ソフィア・リリーフ・サービス (SRS) の改組とバザーの準備

SRS は、上智大学が 1977 年 12 月より全学的に取り組んだインドシナ難民救援活動とその後継組織としての「世界の貧しい人々に愛の手を」の会の活動を引き継ぎ、アジア・アフリカなど世界の困窮者を対象に医療・食糧・住居・教育の改善に資するための支援活動を行ない、またこの実践活動を通じて本学学生、職員などの意識化ならびに本研究所の調査研究を促進することを目的としている。

今年度より新たな体制を立ち上げ、毎年行なっているバザー（10 月に予定）を開催するにあたり、その事前準備として勉強会やパネル作りなどを通し、難民や世界の困窮者の理解を深め、その成果をもってバザーに取り組みたい意欲のある学生を募集した。

- ・担当：小山英之（本研究所所員）

- ・第 1 回バザー実行委員会会議

7 月 13 日（月曜日）12:40-13:20

社会正義研究所（中央図書館 721 号室）

3. 研究企画の概要Ⅱ（これからの予定）

第 29 回国際シンポジウム（国際基督教大学社会科学研究所との共催）

『グローバル化に対抗する運動ともう一つの世界の可能性：

いかに繋がり、いかに変えるか？』

- ・開催日程：2009 年 11 月 29 日（日曜日）10:00-18:00

- ・四谷キャンパス中央図書館 911 号室

〔趣旨〕

2 年前の第 27 回国際シンポジウムで我われは『グローバル化と先進国における貧困と社会的排除』をテーマに取り上げた。当時の日本社会ではまだ一部の人の「新しい」貧困と認識されていた現実、昨年の金融危機に端を発した世界同時不況の到来とともに、もはや誰にとっても身近な日常の不安となりつつある。そのため、年越し派遣村や反貧困ネットワークのように貧困問題に取り組み困窮者を支援する活動は広く知られるところとなり、こんにち一定の市民権を獲得したと言えそうである。しかしながら、新自由主義的政治経済に由来する構造的な貧困問題を個人の責めに帰す「自己責任論」はいまだ根強く、現在注目されている困窮者支援の諸活動さえ非常時の対症療法に終わる危険性をはらんでいると思われる。そこで本年度の国際シンポジウムでは、ネオリベラリズムの専制に正面から抗いオルターナティブな社会のあり方を模索する諸運動とその相互連帯が切り拓く新たな未来の可能性に焦点を置くことにした。国内外の困窮者支援運動はいかに繋がり支えあうことができるのか、またいかに中間層の意識化を果たすことができるのか、そしてどのような「もう一つの世界」

を構想し、そこへ向かう政治の道すじを指し示すことができるのか、これらの課題について論考を深めることができれば、と考える。

[プログラム] (案)

10:00 あいさつ 石澤良昭

イントロダクション・趣旨説明 下川雅嗣 (本研究所所長)

10:20 基調講演

①クリストフ・アギトン (フランス)

②シコ・ウィッテカー (ブラジル)

討論者：下川雅嗣

12:30 休憩・昼食

13:30 パネルディスカッションⅠ「日本における対抗運動ともう一つの世界の可能性」

秋本陽子 (ATTAC ジャパン運営委員)

河添誠 (首都圏青年ユニオン書記長)

ほかもう 1 名

司会：村井吉敬 (本研究所所員)

15:30 休憩

16:00 共同の祈り

16:10 パネルディスカッションⅡ「いかに連携し、人の尊厳を守る社会を築くのか」

司会：中野晃一 (本研究所所員)

17:45 閉会の辞

4. 今後の展望

2007 年秋以来、イエズス会日本管区では「大学使徒職フォーラム」の枠組みのなか本学の建学の精神をよりよく実現するための方途が模索されてきたが、具体的なアクション・プランの作成とその実施に向けた取組の一環として、近い将来に、社会正義研究所を Center of Global Concern (略称：CGC／日本語名称：センター・オブ・グローバル・コンサーン) に改組し、①人間の尊厳と連帯を脅かすようなさまざまな問題をグローバルな視点から研究し、②その成果をもって学生や社会に意識化の場を提供し、③さらに変革のための実践を通じて学生、RA/PD、職員などを世界のひとびとの尊厳と連帯を実現する人材に養成する、の 3 つの活動を有機的に繋げつつ展開することをめざしている。なお JCEAO (Jesuit Conference of East Asia and Oceania) においても education with a social dimension というテーマが優先課題の 1 つとして検討されており、我われは CGC を本学の社会との関わりを体現するような活発なセンターへと発展させていきたいと考えている。

変動する現代世界の社会正義に関わる問題に取り組むという本研究所の姿勢自体に変わりはないものの、CGC では、従来の社会正義研究所と比して以下の 2 点が強調され、改組・名称変更はそのことを明らかにする効果があると考ええる。

①高みに立って施しをするのでも象牙の塔に閉じこもるのでもなく、困窮者たちの主体性と尊厳にむきあい、人間や共同体相互の連帯をもとめ活動を行う。

②こんにち新自由主義を旗印に日本を含めた先進地域と発展途上地域の双方で貧困や暴力などによる人間性の蹂躪が行われていることを直視し、その解明に努めるとともに、グローバルな視点から対抗の可能性を模索する活動を行う。